

11月4日ゼミは開催します**2024年の年会費について**

当会は、1995年の創立から、2024年で29年になります。この間に2011年の東日本大震災や2020年から未だ終了宣言のないコロナ禍を経験しました。会員の皆さんの長い間のご愛顧に心から感謝申し上げます。

当会としては、皆さんのコロナ禍を慰労する事、併せて、コロナ禍前に比べて大きく減少した会員数(現在69名)の増加を図るべく、2024年の年会費を無料とし、併せて長年のご協力に応えたいと思います。

黄禍論から見た世界

—11月4日ゼミ紹介文:齊藤 潔会員記—

黄禍とは、白人種が黄色人種に対する恐怖・嫌悪・不信・蔑視の感情を表現したものである。米国の黒人問題、ナチスのユダヤ人問題、南アフリカにおけるアパルトヘイト問題と同一現象である。平たく言えば、中国人や日本人が白色人種に与える脅威を言うで紹介されている(橋川 文三『黄禍物語』)。

従って、白禍も存在する事になる。19世紀の白人種である欧州列強によるアジアの植民地化や、アフリカの分割は、圧倒的な軍事・経済力で、弱小国を征服する帝国主義と言われるが、被征服国側の黄色人や黒人から見れば、白禍そのものである。本ゼミでは、黄禍論という視点で近現代史を深掘して、歴史展望・知見として提案してみたいと思います。

産業革命を成功させた欧米列強は、19世紀には英のインドに対する完全植民地化、英仏独露日の中国に対する半植民地化、英仏独伊等のアフリカの分割で世界史が進行しました。

一方、米国は欧州の植民地として歴史に登場しましたが、1775年の独立戦争を経て、18世紀には独立を勝

ち取りました。19世紀の米国は、西漸運動で英仏西諸国との交換や買収等を行って領土の拡張を行い、更に、メキシコとの戦争に勝利して1848年にカリフォルニア・ニューメキシコを併合して太平洋に至り巨大国家になったのです。米国はこの領土拡大を「明白なる天命」と正当化しました。1854年の日本への開国強制は、西漸運動の太平洋版になります。即ち、この時期の日本の欧米列強との開国は、白禍そのものだったのです。更に、米国は1880年代になると新発明が相継ぎ、第2次産業革命による経済的台頭が著しく、欧州は米国の攻勢、即ち、米禍に怯えたのです。日本は1868年に明治政府に政権交代し、19世紀末に日清戦争に勝利し、台湾に植民地を獲得し帝国主義国の仲間入りを果たします。しかし、下関講和条約で獲得した遼東半島の割譲は、露独仏の三国干渉で清国に還付させられます。帝国主義間の力の論理に従ったのですが、日本は白禍に敗れたのです。

さて、第1次世界大戦のパリ講和会議での「人種差別撤廃法案」問題に移ります。日本(全権牧野伸顕)は、米国(ウィルソン大統領)提唱の「国際連盟」規約に「人種差別撤」の明記を提案します。議長の米のウイルソン大統領は本人を除く16名の投票を行なったのです。結果は、賛成11名(仏2・伊2・ギリシャ・中国・ポルトガル・チェコ・ユーゴ他)、反対5名(英・米・ポーランド・ブラジル・ルーマニア)でした。しかし、ウイルソンは「重要案件なので全員一致が原則」と宣言したのです。日本は「議事は多数決で決定されたことがあった」と反論したが、ウイルソンは「全会一致、又は反対者ゼロ」と返答し、提案は取下げとなったのです。日本の提案背景には、当時の米国では、中国・朝鮮人同様に日本人移民差別や禁止問題で紛糾しており、特にカリフォルニア州では日本人排斥運動が高まっていた。日本人移民の土地所有や借地禁止の州法が制定され、他の州も追随する状況にありました。又、英連邦下のカナダや豪州でも同

様で、特に豪州の白豪主義(1960年代まで継続)は、有色人種の入国・移住禁止の国民的合意が形成されていたのです。米・豪・加らは、有色人種移民を、自国の都合(金採掘・鉄道建設や経済発展)で受け入れておきながら、白人側に生活上の不利益が生じると、法律でこれを排斥するという黄禍論を持ち出したのです。

中国では1949年に内戦に勝利した中国共産党によって中華人民共和国が誕生した。1840年のアヘン戦争に敗れて半植民化して以来、109年後の独立だった。国民党をアテにしていた米国は大きな衝撃を受けたのです。米国のあるジャーナリストは「中国の黄色共産主義は、ソ連の赤い共産主義よりはるかに危険」と唱えましたが、逆に、「日本人は中・ソに対して逆の感情を抱いている(1955年)」と見なしたのです。

一方、第2次大戦後の日本は、1952年以来20年間の高度成長期に、米国向けの日本の繊維製品や自動車の輸出は、西独より少なかったにも拘わらず、メイド・イン・ジャパンは米人の職を奪うとして危機感を煽った。又、1985年～90年のバブル経済期には、巨額のジャパンマネーが、米国を象徴する不動産(ロックフェラーセンターやコロンビア映画等)を買収し、黄禍を露わにした。しかし、この時期も投資額は英・蘭より少ないにも拘わらず、日本のみが問題視された。2回のバッシングは日本に対してのみ起こったのです。

さて、中国のGDPは、2010年に米国に次いで世界第2位となった。2022年現在のGDPは、米国26.2兆ドル、中国19.2兆ドル、日本4.4兆ドル、独4.1兆ドル、印3.8兆ドルの順となっている。中国は軍事力や巨大経済圏構想(一帯一路)では、米国に警戒心を与えた。米国の中国バッシングは、嘗ての日本に対するように、憎悪に満ちた様相を感じます。

さて、欧米の中国観は、19世紀末の独(ヴィルヘルム2世)が、寓意画「黄禍図」で世界に対する日中同盟の実現を脅威として、欧州世界に警鐘を鳴らした。以来、今日に至るまでの100年以上、中国と日本は対立・戦争状態になり、欧米の思惑通りに推移してきた。本件はゼミで詳述します。

さて、露のウクライナ侵略は帝国主義そのもので決して許されないが、露の主張には手前勝手に神懸かり的民族主義があり、その背景には欧州人とは一線を画した汎スラブ主義が存在すると思います(ゼミで詳述)。

最後に、1991年のソ連解体後の世界は、G7、EU、ASEAN、BRICS等の連合体が、資本主義国対共産主

義、先進国対新興国といった範疇を越えて、多様に展開してきました。この世界情勢の変化を観察するにあたっては、イデオロギーや経済の観点だけでなく、白禍論や黄禍論といった人種論的視点も持ち合わせて、複雑怪奇な事件・事象を分析する必要があると思います。

以上。

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR水道橋駅東口(お茶の水寄り)下車徒歩2分。
- 3、都営三田線水道橋駅下車、A1 出口は長い上り階段。エレベーター利用も可能です。
- 4、電話番号:03-3816-4196

千利休、切腹の謎

—清野 敬三会員記—

◇はじめに◇

千利休は、侘茶^{わびちや}の完成者とされ、茶聖とも称される。信長・秀吉の茶頭となり、諸大名をはじめ各階層にわたる多くの弟子を擁し、「天下一の茶匠」として当時の茶の世界に君臨した。しかし、秀吉との間に不和を生じ、最後は切腹を命じられた。

その切腹の原因が何であったかについては、古来、多くの説が唱えられており、定説を得られないまま永遠の謎となっている。従って、それを云々するのは今さらの感があるが、デスポット秀吉の深層心理に、あえて僕なりに触れてみたい。

◇利休の生い立ち◇

利休は、堺の魚問屋田中与兵衛の長男として生まれ、幼名を与四郎と称した。生年は不詳であるが、死亡時を70歳とし、逆算して大永2年(1522)生まれとする説が定説化している。父与兵衛は、祖父田中千阿弥の千をもらい苗字を「千」に改め「魚屋」を営み、海産物^{おきめ}を納る倉庫を貸し付ける納屋貸しにより利潤を得て、一代で富商になった。

16世紀前半、堺の町は貿易や商業により富を蓄え、自由都市として繁栄した。その富商らの絶好な遊芸として茶の湯が流行し、多くの茶人が現れた。利休が茶湯を学んだのは17歳の時で、北向道陳^{きたむきどうちん}について稽古をしたと言われている。道陳は、堺の富商の出で、能阿弥流^{ないす}の書院・台子の茶事に通達し、茶器の目利きでもあった。その後、道陳の紹介で武野紹鷗^{たけのじょうおう}に入門し、珠光流^{じゆこう}の侘び茶事を学んだ。

従って、利休は能阿弥伝来の書院・台子の貴族向きの茶湯と、珠光伝来の数寄屋の庶民向きの侘び茶事との融合であり、調和でもあった(桑田忠親『千利休』宮帯出版社)。なお、紹鷗に師事した時期に与四郎の名を宗易という茶名に改めている。

◇信長・秀吉の茶頭に◇

永禄 11 年(1568)、信長は將軍足利義昭を擁して上洛し、畿内の覇権を掌握した。將軍家再興を名分として摂津・泉に矢銭を課し、堺には 2 万貫文を割り当て屈服させ、直轄地化していった。その過程で、堺の有力会合衆であった今井宗久・津田宗及らは茶の湯を通して信長に親近すると同時に、鉄砲・火薬などの軍需商人として巨利を博している。

宗易も、天正 2 年(1574)越前一向一揆討伐にあたって信長に鉄砲の玉を調達して送り、謝状を受け取っている。堺商人の一人として利害打算に明るく、抜け目のない商売をしている。信長の催す茶会にもしばしば参加しており、翌天正 3 年には宗久・宗及らとともに信長の茶頭としての地位を確立した。

天正 10 年(1582)本能寺の変が起こり、秀吉が覇権を握る。秀吉も、信長にならい天下の名器の蒐集に力をいれ、茶の湯への執心を一段と高めた。そして信長の茶頭であった宗久・宗及・宗易の三者が改めて秀吉の茶頭になった。

[註]茶頭とは、茶の湯の事を司る役のことで、茶堂とも書く。茶道を「ちゃどう」、茶頭を「さどう」と読ませて区別することもある。なお、禅寺で茶湯の供養を担当する役僧を指す茶頭は「さじゅう」と読む。

◇秀吉の側近として権勢◇

秀吉の時代になると畿内周辺を完全に掌握し、鉄砲と火薬供給のための堺商人への顧慮の必要性が薄れ、宗久の影が薄くなり、宗易が重んじられるようになった。

天正 12 年(1584)秀吉は大坂城築城の際、その一郭に侘茶用の二畳敷の数寄屋を営み「山里」と名付け、宗易と宗及を御茶頭として座敷開きを行っている。その一方、秀吉は城内に、室内全て黄金を張り巡らせた豪華好みの「黄金の茶室」も作っている。

天正 13 年(1585)宗易は秀吉の正親町天皇への禁裏茶会に奉仕し、宮中参内するための居士号として「利休」を勅賜された。それ以来、「利休宗易」と号し、秀吉の御茶頭八人衆の筆頭となり、茶人とし

ての社会的地位も天下に並びなき者となった。

宗易は茶の湯をもって仕えるだけでなく、秀吉の全国制覇の過程でその政治や軍事につよい関心を持ち、裏面での消息に通ずるようになっていく。例えば、島津氏懐柔の際にも書状の交換などに直接関与して、政治向きにも隠然たる権勢をもつようになった。

その結果、豊後の大友宗麟が秀吉の弟秀長を訪問した際、「内々の儀は宗易、公儀の事は秀長が万事心得ているからご心配あるな」と言われるまでになり、「宗易ならではの、関白様へ一言も申上ぐる人これ無し」と評せられた書状が残っている。

◇利休の追放と切腹◇

天正 19 年(1591)2 月 13 日、利休は秀吉の逆鱗に触れ、堺に下り蟄居せよとの命令が下された。その後、再び京都に呼び戻され切腹の申渡しがあり、2 月 28 日京都葎屋町の自邸で切腹した。

利休処罰の理由として、表面上次の二つが挙げられる。一つは、利休が大徳寺の山門を修築し、その楼上に自らの木像を上げた事が不遜・僭上の極みであること。二つ目は、茶道具売買や目利きにおいて、私欲を貪り売僧の行いがあったことである。

木像は山門から降ろされ、聚楽の大門の戻橋で磔にされた。さらに利休の首は、木像の足で踏ませて晒しものにされたという。

◇切腹の背後にある動機の諸説◇

しかし、木像事件と茶器売買だけでは、賜死の理由としては不十分である。そこで、その背後にある真の動機は何であったかについて、古来いろいろな解釈がなされている。以下、その諸説について考えてみる。

1. 秀吉が利休の娘を側室に要求したが拒否されたとの説 江戸初期の古記録にある逸話であるが、これが賜死の積極的原因になったとは考えにくい。
2. 利休が秀吉暗殺の陰謀に加担したとの説 岡倉天心が論及した説であるが、事実であれば利休一人の切腹では終わらない重罪である。また秀吉自身が後に利休を追慕しているからあり得ない。
3. 利休がキリシタンであったから処罰されたとの説 利休がキリシタンであったという証拠は全くないし、もしキリシタンであったなら自害はしない。
4. 秀吉の朝鮮出兵に反対したためとの説 歴史小説のフィクションであり、当時出兵に反対した

人物は大勢いたが、誰ひとりとして処罰されていない。

5. 利休の自業自得説 徳富蘇峰が提示した解釈で、秀吉の寵遇に利休が慣れすぎて増長し、専横不法の感を秀吉に与えた、つまり自業自得であったとする。これは一面の真理が含まれていると思う。
6. 利休の権勢への反感と嫉妬説 利休の庇護者秀長の死亡により、利休を憎み嫉む一派の讒言や中傷が秀吉を動かしたとする。利休の専断と僭上の行動から、これは動機の一つとみることができよう。
7. 秀吉政権内部の権力闘争の犠牲説(田中仙堂『千利休天下一の茶人』宮帯出版社) 政権内に中央集権(強硬)派と地方分権(宥和)派の派閥があり、利休は宥和派に加担したため報復されたとする。しかし、利休に報復したとみるのはやや無理があろう。
8. そもそも切腹はなかったとする説もある(中村修也『千利休』朝日新書) 切腹は当時の一次史料にはなく、追放されただけとする。後日、名護屋城に出陣していた際、秀吉から母親の大政所にあてた手紙に「利休が茶にて御膳もあがり」との表現があり、利休は保護され生きていた証拠とみる。しかし、これは「利休の流儀による持箸日でご飯を食べた」と解釈すべきで賛成できない。
9. 封建的身分階級確立の犠牲説(桑田忠親 前掲書) 秀吉は天下平定後、封建的な社会秩序の建設つまり身分制を固定化するにあたり、最も目障りなのは大名や武士を軽視する堺の町人であった。特に傲慢な利休を抹殺する必要があったとする。一つの理由となろう。
10. 独裁者秀吉の征服欲に対する芸術家利休の不屈的な抵抗と反撥説(芳賀幸四郎『千利休』吉川弘文館人物叢書)。秀吉の豪華好みと、利休の侘びが互いに妥協し共存していたが、秀吉の征服欲の増大につれ、利休の俗的権威を否定する芸術家としての理念とが妥協を許さなくなった。10月35日やや、利休を美化しすぎる感があるが、首肯できる説である。

◇おわりに◇

利休賜死の動機として上記のように諸説あるが、否定すべきものは除いて、諸々の原因が重なった複

合的なもので、一つに絞る必要はないと思う。利休は秀吉茶頭の筆頭となり、茶の上だけでなく政治の上でも強大な権勢をもつようになった。尊大な印象を与え、周囲の反感を買うようになり、遂に虎の尾を踏んでしまったものと考え。

僕はこれらの説に独裁者秀吉の内心の Inferiority complex を付け加えたい。秀吉の個人的な劣等感を刺激したことが、直接の引き金だったのではないか。秀吉は、外貌や出自について、心の奥底に引け目を持っていた。信長に仕えていた時ならいざ知らず、天下人になった今は、他人には絶対それを言われたくない。利休もその辺は心得て気を使っていたが、寵遇に慣れて何かの拍子に態度に出でしまい、秀吉は敏感にそれを感じたのではないか。しかし、それを理由にすることは自らのコンプレックスを露呈することになるから、口が裂けても言えない。それだけによけい衝撃が強く、鬱積していた感情が一時に爆発した。これは当然ながら証拠はない。僕の想像であり、下司の勘繰りかも知れない。了

次回12月2日ゼミ・テーマ

次 修験道について—市川 達雄会員

2024年ゼミ(5月以降の日日は予定)

- 1月13日:古事記の謎—小川 孝一郎会員
- 2月3日:5世紀の技術革新:渡来人が伝えたもの—永井 輝雄会員
- 3月2日:縄文・弥生時代の問題点①
—飯田 真理会員
- 4月6日:古気候学の概要—磐城 妙三郎会員
- 5月4日:古代の天皇や権力者が入った温泉の泉質とは—記紀や風土記に見られる温泉—
相澤 省一会員
- 6月1日伊勢神宮の創建Ⅲ—明治の宗教改革—
増田 修作会員
- 7月6日:歴史人口学—亘 康男会員
- 8月は休講(猛暑予想の為)
- 9月7日:西アジアとは何か—山腰 直仁会員
- 10月5日:神社の向きが示すヤマト王権の誕生
—槌田 鉄男会員
- 11月2日:受領と郡司—齊藤 潔会員
- 12月7日:縄文・弥生時代の問題点②
—飯田 真理会員

以上。